



主日礼拝式プログラム 8:45~10:15am

お知らせ

風の吹くままに

賛美

「聞けや歌声」

「私たちは一つ」

「いと高き所に栄光が」

「インマヌエル」

献金

牧会祈禱

主の祈り

聖書朗読 マタイ福音書1章18節～25節 南部 郁

メッセージ 「インマヌエル 神は我らと共にいる」

関 真土牧師

賛美 「Still 静まって知れ」

頌栄 祝禱

- 本日はアドベント(待降節)第四節です。
- 今週は、キャロリングを実施します。参加希望の方は、受付のサインナップシートにサインしてください。
- また、是非我が家にも来てほしいというリクエストがありましたら、どうぞ関牧師までお知らせください。
- ホノルル教会のキャンドルライトサービスは、12月24日(土)7pm～8:30pm。礼拝堂にて持たれます。
- 12月25日のクリスマス礼拝は、家族で参加するファミリー礼拝です。どうぞ、お子さんと一緒に礼拝に参加してください。
礼拝の中で、子ども向けのメッセージ&子ども祝福式が持たれます。
- 25日のクリスマス、6pmから牧師館でクリスマスディナー(ポトラック)があります。ご予約がなければ、どなたもお出かけください。
- 今年の年末祈禱会は、12月31日(土)10amからです。

▼今日は、アドベントの第4節を迎えました。キャンドルの火がだんだん明るくなり、私たちの気持ちも高鳴ってきます。

▼この12月は、「師走」と言われます。師(お坊さん)でさえも忙しく走り回る時期という意味があります。確かに何かせわしなく、街全体が忙しい雰囲気になってきます。

ただ「師走」の意味には、もう一つの説があります。昔の中国で、師(軍隊)の兵士たちが、この時期だけ兵役を解かれて家に帰ることが許されたのだそうです。兵士たちは喜びに満ちて走って家に帰ったという意味があります。

▼ハウスはあってもホームがない、と言われる時代です。でも私たちには、帰るべきホームがある。私たちをありのままに、大きな喜びを持って迎えてくれる、本当のホームがあるのです。

クリスマスとは、私たちが帰るべき本当のホームに帰る時です。あの羊飼いたちが、喜んで急いで救い主のもとへ行ったようにです。

この「師走」の時期。どうしても忙しくなります。だからこそ、心静めて、救い主イエスのもとへ行きましょう。

会堂礼拝とオンライン礼拝が、主の御霊によって

一つとされ共に主を礼拝いたしましょう

献金



関真土牧師

Sekishinji89@gmail.com

2022年度聖句

あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。

繰り返して言うが、喜びなさい。

スモールグループの心得

心を傾けて聴こう、理解しよう、共感しよう。教えない、否定しない、批判しない。そのままを受け入れましょう。



分かち合いのポイント

- ①第一のインマヌエル。
神を知らない、求めない者と共にいる神です。
- ②第二のインマヌエル。
動揺し、苦しみ、悩む者と共にいる神です。
- ③第三のインマヌエル。
神を拒絶する者と共にいる神です。

それぞれ、感じたこと、考えたことを分かち合いましょう。

マタイの福音書 1章 18～25節

イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った。彼がこのことを思い巡らしていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」このすべての出来事は、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。ヨセフは眠りから覚めると主の使いが命じたとおりにし、自分の妻を迎え入れたが、子を産むまでは彼女を知ることにはなかった。そして、その子の名をイエスとつけた。

ホノルル キリスト教会

2207 OAHU AVENUE, HONOLULU, HI 96822

日本語部 事務所 ☎ (808) 973-4335

Email : office@honoluluchristian.church



ホノルルキリスト教会 2022年12月18日

週報



賛美の御言葉 ルカの福音書 1章 46～48節

私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。この卑しいはしのために目を留めてくださったからです。ご覧ください。今から後、どの時代の人々も、私を幸いな者と呼ぶでしょう。